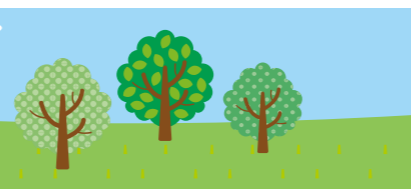


農業掲示板 8月



水 稲

水管理・斑点米対策

(水管理)

開花期及び開花期以降の水不足は、籾の稔実不良をまねくとともに胴割れ米の原因になりやすいため、出穂後は間断灌水(3日湛水⇒2日落水)または飽水管理(田面の溝や足跡に水が溜まっている状態)の水管理を行います。極端な早期落水は品質の低下を招く恐れがあるため、落水は刈り取り(収穫)7日前を目安に行いましょう。(高温乾燥が続く場合は軽く走り水を行いましょ)

(斑点米対策)

・カメムシ類はイネ科雑草付近で生息し、稲が出穂すると水田に飛び込み穂を吸汁加害します。一斉防除や無人ヘリコプター散布などの基幹防除を実施し、発生が多い場合は、スタークル粒剤(3kg/10a・収穫7日前・3回以内)またはトレボン粉剤DL(3~4kg/10a・収穫7日前・3回以内)で臨機防除を行いましょ。散布時期の目安は出穂後7~10日頃です。
 ・また、畦畔の草刈は出穂2週間前には必ず済ませ、出穂後1ヶ月間(7月下旬~8月下旬)は畦畔の草刈は実施しないようにしましょ。

水稲定点調査結果

	6月1日期		6月15日期		7月1日期	
	草丈	茎数	草丈	茎数	草丈	茎数
令和3年度	27.8cm	6.2本	36.1cm	17.8本	55.5cm	24.1本
過去平均	24.4cm	7.5本	34.2cm	17.5本	56.1cm	23.7本
平年対比	114.2%	82.0%	105.7%	101.8%	98.8%	101.7%

黒大豆・黒枝豆

水管理・追肥・病害虫防除

(水管理)

開花期以降は着莢や子実の肥大のために土壌水分が必要で、土壌水分が不足すると着莢率が低下します。降雨がない場合は、畝間が白く乾く前に畝間灌水を行いましょ。ただし高温時の灌水は根を傷めるので日中の暑い時間帯を避け、早朝または夜間の涼しい時間帯に行いましょ。また、長時間の停滞水は、立枯性病害の発生を助長させる恐れがあるので走り水程度とし、ほ場の端まで水が行きわたれば灌水をやめましょ。

台風等大雨が予想される場合は、速やかに排水できるよう溝さらえとともに排水溝の整備をしておきましょ。

(追肥)

開花期以降は着莢や子実の肥大のために窒素肥料が必要となります。慣行型栽培体系の場合は、8月中旬(開花期)にNK化成2号を40kg/10aを目安に施用します。

(病害虫防除)

8月に入るとハスモンヨトウ、マメシキイガ、カメムシ類、ハダニ類等の害虫や、茎疫病等の病害が発生しやすくなります。こまめに圃場を観察し、発生初期もしくは予防的に防除を行いましょ。また、各営農経済支店に置いております、黒豆情報を参考にしましょ。

黒大豆と黒枝豆では使用できる農薬が異なる場合があります。使用前には栽培こよみや農薬ラベルを確認しましょ。

使用できる薬剤(殺虫剤・殺菌剤)一覧

適用病害虫	薬剤名	希釈倍数	総使用回数(収穫前日数)	
			黒大豆	黒枝豆
マメシキイガ マメヒメサヤムシガ カメムシ類	スミチオン乳剤	1,000倍	4回以内 (収穫21日前まで)	4回以内 (収穫21日前まで)
マメシキイガ カメムシ類 ハスモンヨトウ フタスジヒメハムシ	トレボン乳剤	1,000倍	2回以内 (収穫14日前まで)	2回以内 (収穫14日前まで)
マメシキイガ アブラムシ類 ヨトウムシ類	アディオオン乳剤	3,000倍	3回以内 (収穫7日前まで)	3回以内 (収穫14日前まで)
マメシキイガ カメムシ類 フタスジヒメハムシ	アグロスリン乳剤	2,000倍	3回以内 (収穫7日前まで)	3回以内 (収穫7日前まで)
ハダニ類	ニツラン水和剤	2,000倍	2回以内 (収穫7日前まで)	2回以内 (収穫21日前まで)
ハダニ類 (多発時)	コロマイト乳剤	1,500倍	2回以内 (収穫前日まで)	2回以内 (収穫前日まで)
ハスモンヨトウ (多発時)	フレバソフロアブル5	4,000倍	2回以内 (収穫7日前まで)	3回以内 (収穫3日前まで)
茎疫病・べと病	ランマンフロアブル	1,000倍	3回以内 (収穫7日前まで)	3回以内 (収穫3日前まで)
茎疫病・べと病	ライメイフロアブル	2,000倍	3回以内 (収穫7日前まで)	3回以内 (収穫3日前まで)
台風・強風後	Zボルドー	500倍	—	—

農業掲示板 8月の農作業



山の芋

山の芋の追肥・病害虫防除について



(追肥)

スムーズに芋を肥大させるためには、肥大開始期までに追肥を施用しておくことが重要です。追肥作業は7月下旬が適期です。

施用量の目安は、NK化成2号を施用する場合で10aあたり50kg(窒素量8kg/10a)、有機入園芸化成A801を施用する場合で10aあたり100kg(窒素量8kg/10a)です。ただし、元肥に省力型のスーパーエコロング413を施用している場合は追肥の必要はありません。

追肥時期が遅れたり施用量が多いと、変形芋の発生が増える原因となるので、栽培こよみに準じて、適正な追肥時期と量を守りましょ。

追肥の方法は、つるを持ち上げ、株と株の間に施用します。つるや葉に肥料が付いたままでは焼けることがあるので、必ず肥料を払い落とすことしましょ。

追肥時期から9月下旬にかけては、新芋が形成されて肥大する時期です。追肥の効果を高めるために、晴天が続く場合は、谷が白く乾く前に、走り水程度の谷水をとりましょ。

(病害虫防除)

葉洗病は8月中旬以降に発生が多く、発生がひどくなると葉に白色の粉を生じ、葉が枯死して減収につながります。防除はラピライト水和剤400倍液やストロビーフロアブルの2,000倍液で行いましょ。

害虫では、カンザワハダニやナガイモコガが梅雨明け後の高温乾燥で発生が増える傾向があります。コテツフロアブル2,000倍液で防除しましょ。ハダニ類は薬剤抵抗性が出やすいため、同一薬剤の連用は避けてローテーション散布を心がけましょ。防除のタイミングは、発生量が多くならいうちに、防除することが大切です。

ハダニ類が多発生した場合は、臨機防除薬剤であるコロマイト乳剤1,000倍液を散布します。高温時は葉害が出やすくなるため、気温が下がる朝早くか夕方に散布しましょ。

農薬を散布する時には、必ず農薬容器、袋のラベル等の記載内容を確認し、使用基準(適用作物・使用量及び希釈倍数・使用時期・総使用回数)を遵守しましょ。

小 豆

排水対策・中耕培土・追肥・水管理・病害虫防除

(排水対策)

・播種後、生育期間中に突然の大雨や長雨、台風によりほ場内に雨水が停滞する時間が長くなると、湿害を引き起こす原因となります。播種等の作業をした際に、谷溝や額縁明きょが崩れていないか確認し、滞水しないように必ず溝をさらえ、排水口まで連結しましょ。

(中耕培土)

- ・中耕培土は上根の発生を促し、土中に酸素が入りやすくするため行いましょ。それにより、根粒菌の活性が高まり、生育を旺盛にします。また、除草や倒伏防止の効果もあります。
- ・中耕をする時期は、第4~5本葉展開の頃です。遅すぎると土壌表面付近まで伸びた根を傷つけてしまうので、8月20日までに行いましょ。
- ・培土は、第1本葉の直下まで土を寄せましょ(図)。
- ・中耕培土後は、谷に落ちた土を必ずさらえ、谷溝や額縁明きょが排水口まで連結していることを再度確認しましょ。

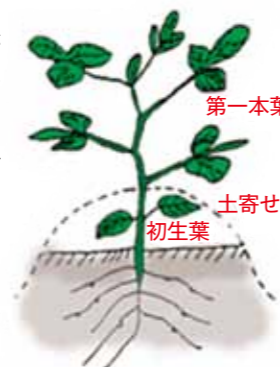


図 中耕培土のイメージ

(追肥)

- ・中耕培土の前に、生育促進のため、ホスプラス500倍液を10aあたり100~150リットルを株元に灌注するか、垂りん酸粒状1号を10aあたり2kgを株元に散布して下さい。
- ・開花初め頃にNK化成2号を、10aあたり20kg施用します。この際、葉が濡れた状態で施用すると肥焼けるので、注意してください。

(水管理)

・小豆は比較的乾燥に強いので、特に強い干ばつ時以外は灌水する必要はありません。開花期以降に長期間降雨がなく、土が白く乾くほど強い干ばつ時は、夜間に走り水程度の畝間灌水を行います。灌水をする場合は、多湿により茎疫病の発生を助長しますし、日中まで長時間水を溜めておく根を傷める原因になるので、水量が多くなりすぎないように注意してください。

(病害虫防除)

- ・小豆の害虫は主に、アブラムシ類、カメムシ類、ガ類の幼虫です。なかでも、蕾や花から食害するマメノメイガ、莢や莖を食害するアズキノメイガやマメヒメサヤムシガ等のガ類の幼虫は、収量に直接影響する害虫です。これらの幼虫は小型で目立たないためほ場の中で初期発生を見つけるのが難しく、被害を確認してからでは防除適期を逃してしまう可能性が高いため、**JA栽培こよみを基本に、開花初めの頃(8月中旬~9月上旬)から7~10日おきに3回程度の防除を行います。使用にあたってはラベルに記載された必要量の薬液を散布することが肝心です。**
- ・長雨はさび病、冠水は茎疫病の発生を助長し、逆に乾燥する場合はダニの発生が多いため、気象条件に対応して栽培暦を参考に予防を行ってください。

今後の

24時間OK / 農業技術テレホンサービス 電話:079-556-3384

7月16日 ▶ 7月29日

黒大豆の病害虫防除と水管理

7月30日 ▶ 8月12日

丹波栗の病害虫防除

8月13日 ▶ 8月26日

黒大豆と小豆の病害虫防除

丹波篠山農産物相談・研究センター 開所日時:月・水・金の週3日 10:00~12:00 (ただし祝日・年末年始を除く)